

SPECIAL TALK SHOW

IWCの腕時計を身に着けた3人の女性が考える、女性を取り巻く環境、そして女性リーダー育成の現状とは？

高級時計マニュファクチュール・IWCの創業地であるシャフハウゼンを訪れた女性たち。美しい時計を作るブランドのキーパーソンたちとの会話から、自らの、そして女性としての働き方を考えた。そんな思索の一部を、Forbes JAPAN WOMEN AWARDで開催されたトークショーにて披露。

text by Tsuzumi Aoyama | photographs by Gyo Terauchi 青山 葵 = 文 寺内 暁 = 写真



谷本有香◎フォーブスジャパン副編集長兼ウェブ編集長。証券会社、Bloomberg TVで金融経済アンカーを務めた後、2004年に米国でMBAを取得。2016年より現職。

武井涼子◎電通、マッキンゼー、ディズニー等を経て現在、グロービス経営大学院准教授(マーケティング)。コロンビア大学MBA修了。二期会所属のオペラ歌手でもある。

中野香織◎エッセイスト、服飾史家、明治大学国際日本学部特任教授。男女ファッション史から最新モード事情まで、研究・執筆。著書『紳士の名品50』(小学館)ほか多数。

奈野純子◎円谷プロダクションマーケティング本部長。経営コンサルタントを経てポケモンやディズニーなどエンターテインメント業界でマーケティング、新規事業立ち上げの経験豊富。

女性を取り巻く環境やリーダー育成。女性目線で感じていることは？

谷本有香 (以下、谷本)：女性たちの働き方や生き方、これからの女性像について語り合うシャフハウゼン会議が2017年の初夏、開かれました。IWCの創業地であるスイスで、この高級時計ブランドの成り立ちやブランディング、マーケティングの考え方を学びました。そしてIWCという素敵な時計を身につけるにふさわしい女性であるためには？ということもお話しさせていただきました。今回、ウーマンアワードという場では多くの女性や女性活躍の環境づくりに積極的な企業が表彰されたわけですが、この様子をみなさんをご覧になり、女性を取り巻く環境や、女性リーダーの育成という状況をどんな風に

見ていらっしゃるかお話しいただけますか？

武井涼子 (以下、武井)：先月、ミシェル・オバマさんの講演を聞いたのですが、面白いことを言われていて、「女性問題は、100年くらい問題だと言われているのに、さっぱり解決しないのは、本気で解決する気がないからに違いない」と。彼女は、この問題は男性にも本気で頑張ってもらわないと解決できないということを言いたかったのです。今日、この場には男性の方も多くいらっしゃるの、まずこのメッセージをお伝えしようと思いました。さて、最近、女性に限らず副業解禁が話題ですね。ただ、自分がパラレル・キャリアなので思うのかもですが、逆説的ですが、副業の前に、まず、必死で一つのことに打ち込む時代があってもいいと思うんです。やりきる感覚を知っているからこ

そ、両方ができるようになる。私も例えば、マッキンゼー時代などは、睡眠時間を削って夢中で働いていました。その働き方自体が良いとは申しませんが、本当にやりがいのある仕事を女性に渡し、会社の業務と女性の夢が重なって、彼女が100%の力を注いで働ける時期というのがあってもいいのでは、と思うのです。

中野香織 (以下、中野)：プロジェクトのリーダーや組織のリーダーにスポットライトがあたり、活躍する女性が脚光を浴びるのは本当に素晴らしいことです。その一方で、たとえば大学の仕事の場合、講義のたびに数百枚の印刷物を用意してくださる方もいるわけですが、脚光を浴びることがなくても不満も漏らすことなく働いてくださっている方々に私たちは感謝の気持ちを忘れてはいけないと思



登壇した女性3人の手首で静かに輝くIWCのダ・ヴィンチ・オートマティック36。36mmのケースは可動式のラグのはたらきにより、女性の細い手首にもしなやかにフィット。サントーニ社がIWC向けに特別開発した色味のアリゲーターストラップもまたエレガントな雰囲気放つ。

いますし、そんな方々にもっと光が当たる社会であつたらいいのではないかと思います。

谷本: すべての方にスポットライトを当てるような、きちんとした評価制度を作っていかなければいけないということですね。空野純子さんいかがでしょう。

空野純子 (以下、空野): 実は私は2017年の6月まで竹尾という名前で仕事をしていたのですが、旧姓の空野に戻しました。離婚をしたわけではありません。自分のアイデンティティーを考えたときに今のキャリアを作り上げてきた根本にある自分の呼称として空野である、と感じたからです。社会制度と働き方の関係があるなかで、自分が居心地良く、やりがいを感じ、やりたいと思える仕事をする、そのデザインが自分自身でできるようになることが大事な改革なのだろうと思っています。企業のみなさまには、ルールを示すだけでなく、あなたが働き方を選ぶことを認めます、と提示できる企業が増えて欲しいと思うわけです。私自身も、子どもができたときに当時のコンサルティング会社で働くことは難しいと考えて転職をした経験があります。ライフステージの変化にあわせて色々な生き方と働き方があるということが、もっと社会に共有されていくといいなと思っています。

谷本: 個人のデザイン力も大事ですし、そこできちんと結果を出す、企業はその働き方を受けとることが大事ですね。さて、登壇者のみなさんは素敵なIWCの時計、ダ・ヴィンチをつけていらっしゃるようですが、IWC訪問で女性として思ったことがあれば、みなさんに共有していただきたいと思います。涼子さんからよろしいですか？

武井: やはりクルト・クラウスさんにお会いできたのが白眉でした。現在存命の時計職

人さんの中で最も有名な方で、まだCADがなく手作業で時計すべての設計をしていた時代に、永久カレンダーをモジュール化することに初めて成功した方です。そんなクラウスさんがキラキラと少年のように目を輝かせて「いまの機械はすごいんだ、この技術で時計作りの技術がさらに進み、時計はもっと性能の良いものになる」と言うんです。時計職人さんの立場では、機械は彼らの仕事を奪うものかもしれないのに、伝統を守るのではなく改革に向かうべきだと情熱的に私たちに話すんです。そのとき感じました。ダーウィンが言っていたようにやはり人間のなかで一番の強者はフレキシブルなものだなと。私も、フレキシブルに新しいことを受け入れてしなやかに生き方を変えていける女性になりたいと強く思ったのを覚えています。

中野: 私は、最高マーケティング責任者(CMO)であるフランシスカ・グゼルさんという女性のお話が印象に残っています。彼女はIWCに来る前はあるラグジュアリーブランドのCEOだったんです。IWCでのポジションは肩書としては下がるわけですが「家族のゆかりのあるシャフハウゼンにあるIWCで働くことは、昔から私が本当にやりたいと思っていた仕事だから、肩書は一切気にしない」と明るく言い切るんですね。そんな社会的評価のアップダウンを気にせずやるべきことに邁進する態度がとても魅力的に感じました。実は私

自身もキャリア形成において、彼女と似た決断をしようとしています。そのときに背中を押してくださったのが、先程のグゼルさんの言葉と、そのときの笑顔だったんです。

空野: 私はもともと理系だったこともあり、働く職人のみなさん一人ひとりの凄まじい熱意、手仕事から極めて精巧なものづくりを行い、正確に時を刻む時計を作る、そんなIWCのみなさんの魂に感動してしまいました。私は円谷プロダクションで映像制作などしていますが、クリエイターのみなさんの職人的なこだわり、美や技術を追求する姿勢に、IWCの情熱ある職人さんたちと自分の周りでものづくりをしている方々に重なりあう部分を発見し、クリエイターのみなさんがますます素敵に感じられるようになりました。

谷本: ありがとうございます。多くの企業の方に覚えていただきながら、私たち自身も女性の活躍を支援していきたいと思っております。よろしく願い申し上げます。F



会場にはIWCの特設ブースも設けられ、来場者は興味深そうにディスプレイされた時計を眺めていた。

IWC

<https://www.iwc.com/>